

ポスター賞受賞者からの声

「実験上の工夫」・「アピールポイント」・「アドバイスを受けた点」を上手く表現し活発な議論を促すものかという観点からポスター賞3件が選ばれました。その受賞者からのコメントは以下の通りです。



左から順に、鈴木里歩さん、前野佑樹さん、広田健一さん、二宮建さん。右は領域世話人の安部良教授

演題名「錯視を利用した内視鏡画像(動画&静止画)

画質改善手法の一提案」(特許出願番号:2011-070587)

二宮 建(がん医療基盤科学技術研究センター、理工学部・土木工学科・地球環境工学研究室[小島研]、修士2年)、広田健一(同、修士1年)

記念すべき総合研究機構バイオ領域第1回若手WSのポスター賞をいただき、大変光栄に思います。私達の専攻はリモートセンシング分野ですが、バイオ領域において研究発表の機会を与えていただき、貴重な経験になりました。私達の研究内容(画質改善策)が異分野の研究にも適用できる可能性を感じました。次年度以降も、様々な研究分野の方々と意見交換できるこのような発表会を後輩達のために未永く継続していただけることを願っております。 <http://www.rs.noda.tus.ac.jp/estlab/movie/index.htm>

演題名「Lipid A 類縁化合物を用いた肺がん細胞傷害活性の誘導」

鈴木里歩(戦略的物理解析化学研究基盤センター、薬学部・生命創薬科学科・薬効物理化学研究室[寺田研]、修士1年)

様々な分野の方と活発なディスカッションができ、楽しく視野を広げることができました。研究室を越えて、工夫点や特に問題点について気軽に情報交換をする場は今まででありそうで無かった為、大変有意義な時間でした。この日に得られた知識、方法をフィードバックし、より質の高い研究を目指したいと思います。

演題名「イネのCa²⁺ 活性化型プロテインキナーゼOsCIPK14/15の発現制御と生理機能の解析」

前野佑樹(RNA科学総合研究センター、理工学部・応用生物学科・植物分子生理学研究室[朽津研]、修士1年)、来須孝光(同、研究員)

今回、総合研究機構バイオ領域 若手WSに参加させていただき、改めて自分の研究と向き合うことができました。また、他学科、他学部の様々な方との交流を通して、さらに研究への意欲が湧きました。この交流を通して得たことを、今後の研究に生かしたいと思えます。この度、貴重な研究発表の機会を提供して下さった、WS関係者各位の皆様にご挨拶を申し上げます。

今後の発展への願い

今回、発表者や参加者の方々からは、「貴重な場を設けていただき、感謝しています」、「様々な分野の研究者と情報交換できるのが楽しみです」、「ポスター発表を通じ、たくさんの方からご指導頂きたい」といった言葉や想いを開催準備の段階から多くいただいていた。これは本学における研究交流が今後ますます活性化し、全体の研究レベルが大きく向上していくことを期待させるものです。

最後に今回幹事からのお願いです。国内外に広く目を向けると、より活発な若手研究者集団やコミュニティは多数存在し、彼らは研究交流から共同研究やビジネス化などの実を生み出しています。本学学内でも研究交流がますます深まり、そこから質の高い実が生み出されていくことなどから、本学が教育機関・研究機関として益々発展することを切に願っています。

編/集/後/記

多くの好評を戴きました本ワークショップも、発表演題の締め切りが近づくまでは本当に演題が集まるのか、当日までも本当に参加者を集まってもらえるのか、直前までドキドキしながら計画・準備を進めていました。当日は、福山秀敏機構長がご多用にもかかわらず出席くださいました。企画の開催にあたりましては、領域世話人である安部良教授、幹事2名の所属する研究センター長の武田健教授、11名の実行委員、事務の方々や、セミナーハウスの担当職員のご多大なるご支援を賜りました。併せて、本企画の開催をお許しいただき、本記事執筆の機会を賜りました総合研究機構と、すべての当日の参加者に感謝の意を申し上げます。

News Letter “ RIST ” 第4号 ©東京理科大学総合研究機構

発行日：2012年2月

発行者：東京理科大学総合研究機構研究推進室 〒278-8510 千葉県野田市山崎2641

E-mail : ristnews@rs.tus.ac.jp

詳細情報▶URL http://www.tus.ac.jp/labo/research_synthesis.html

RIST

Research Institute
for Science and Technology

News Letter 2012.No.04

東京理科大学総合研究機構 ニュースレター

バイオ領域2011年度ワークショップ特集号



バイオ領域ワークショップで見た理科大パワー

総合研究機構 バイオ領域世話人 安部 良

昨年より始まったバイオ領域ワークショップは、今回は企画から実行、すべて若手中心に行い、彼らの頑張りにより若手研究者、学生が応え、大変盛り上がったものになった。もとより野田キャンパスには薬学部、理工学部・応用生物科学科、基礎工学部・生物工学科、そして生命科学研究所のバイオ領域系のラボが80を数え、2,500人の学部・大学院生、130人の教員・研究者がおり、また、生命科学研究所やゲノム創薬センターなどの数多くの最新の設備・装置を備えた研究施設が立ち並び我が国でも他に類を見ないバイオ研究、教育の拠点である。さらに、最先端のバイオ研究や医療技術の進歩に欠かせない、機械、材料、情報などの他の理工系の教育・研究基盤も存在している。これだけの恵まれた立地条件とリソースを有効に使えば、本学ならではの画期的なバイオ研究、教育を行えるはずである。今回のワークショップでの学部生、大学院生の目の輝きを見て、このような試みを発展させれば、学部、研究科の枠を超えた、新たな生命系領域の研究・教育体制が生まれるのではないかとこの夢を感じさせるワークショップであった。



バイオ領域第1回若手ワークショップ：感動と期待

総合研究機構 機構長 福山秀敏

2011年11月16日に野田セミナーハウスで開催された「バイオ」領域第1回若手ワークショップ(Ws)は、2005年11月に設置された総合研究機構の歴史の中で最も感動的な活動の一つでした。参加者全員に祝意を表します。とりわけ二人の幹事、領域世話人、幹事が所属する研究センター長には祝意と共に敬意を表します。

Wsではまず1分間のプレビュー39講演がありました。そこでは各講演者がアピールしたいことばかりでなくアドバイスを求める事項についても率直かつ明快な紹介があり、すぐにも実質的な意見交換が進みそうでした。実際に講演後のポスター会場での熱気に圧倒されました。この意見交換の中から「理科大ならではの」特徴ある研究が誕生することを確信しました。Wsに参加しなかった学長に後日この様子をご報告しましたが、学長は大変残念そうで、次回を期待しておられました。

私は「物性物理」研究を専門としていますが、大学院生の時にしばしば参加した「物性夏の学校」を思い出しました。そこには全国から大学院生が集まっていました。大学院生時代から学位を取ってまだ年月が立っていない時期の、このような機会に出会った友人がその後の人生での「宝物」となることを私自身の経験から知っています。本Wsの参加者がたくさんの「宝物」を手に入れたことを確信します。

学内で活発な研究交流企画を行うために

総合研究機構戦略的環境次世代健康科学研究基盤センター(薬学部・武田研究室) 梅澤雅和、立花 研

はじめに

総合研究機構のバイオ領域で「第1回若手ワークショップ」が、2011年11月16日に野田キャンパスのセミナーハウスにて開催されました。各研究室の学生を中心とした研究発表は、1分間プレゼンテーションとポスター前での詳細質疑という初めての試みでしたが、39の研究発表に対して151名(学生107名)の方々が参加され、若さと熱気に溢れた3時間余となりました。

私たち幹事は、ワークショップを「各々の研究者や学生がどのような目的を持って研究に取り組み、目的の達成に向けてどのような工夫をしているのか(しようとしているのか)」につい

ての情報交換の場とすることを主眼に企画しました。

準備から開催報告までの幹事としての活動を通して、
 1)ニーズをつかむことと
 2)常に目的を意識から外さないことの大切さを改めて

感じました。以下、この2点を中心に、私たちが考える企画のあり方について、ワークショップの開催報告を兼ねて紹介させていただきます。



幹事の梅澤と立花です



安部良教授(バイオ領域世話人)の1分間講演で始まった発表会と、当日の参加者



学生も研究員も助教も対等にディスカッション



ニーズを拾って仲間を募る

若手ワークショップ開催のチャンスは、総合研究機構バイオ領域で活発な研究交流を実現する企画をしたいという安部良教授(バイオ領域世話人)の強い思いの下に集まった会議でいただきました。そこで幹事として最初に行ったことは、参加者の主体としたい若手研究者や学生が何を求めているかを確認することでした。

学内の一つの研究領域で開催するワークショップで求められるもの(ニーズとなるもの)は何か?焦点とすべき課題は何か?などを話し合った結果、克服すべき最も重要な課題の一つが見えてきました。それは、「総合研究機構の研究センター/部門/プロジェクトに属する研究室でも、そこに所属する学生や若手研究者には研究上の実際的な工夫を他の研究グループと交換したり共有したりできる機会がほとんどない」という点でした。幹事には他の幾つかの企画案がありましたが、それに共感する人がいなければ企画は成り立ちません。企画者(幹事)と参加者とで共有できる目的を初めに把握できたことは、企画の準備を進めていく上でとても重要なポイントでした。ここで、この課題のピックアップは、前記の会議に参加した3名の大学院生が私たちの相談に応じてく

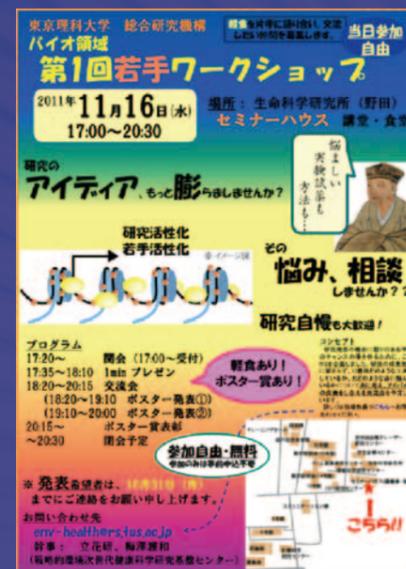
れたことで速やかに行うことができました。彼らに感謝すると同時に、日頃からさらに上を目指すための課題意識を持っている大学院生に出会えたことを、とても嬉しく思います。

次に、この課題を克服できる企画を実現するためとして、このワークショップの目的を次のように決めました。

- 1)各研究グループに属する若手研究者や学生が有用な情報を交換し合い、研究における課題克服のための工夫を共有すること
- 2)学外での研究発表の機会が限られている若手研究者や学生に光が当たる場にする
- 3)若手研究者や学生の研究のアピールポイントや悩みに焦点を当てること

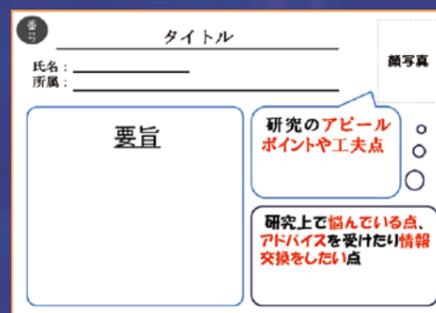
次に、ニーズを拾って目的を定めた後には開催に向けた準備を進めるための仲間が必要になります。実行委員を募ると良いという安部教授からのアドバイスに従って募集をした結果、複数の若手研究者(助教、ポスドク研究員、大学院生)から協力の快諾をいただきました。この仲間の募集も、当日の運営を含めた準備の重要なポイントでした。

目的を軸に直前の準備を進める



ワークショップの開催日を2011年11月16日と決め、急遽10月下旬に発表要旨と要旨の募集を行いました。演題募集の期

間は2週間と短かったのですが、多くの方のご応募・ご協力をいただきました。実行委員の仲間の努力の成果だと考えます。ここで、広報用ポスターや発表要旨集には、ワークショップが若手研究者や学生の研究のアピールポイントや悩みに焦点を当てるといった目的に合うように工夫を施しました。そして、発表者も、要旨の中に自分自身や研究課題の個性を表現する形で私たちの工夫に応じてくれました。この要点を得た



た要旨集は、当日の限られた時間内での活発な研究交流や情報交換の実現に貢献したと自負しています。

研究発表者と演題は中綴じの一覧表をご覧ください。学生が主体に行われたことがお判りいただけると思います。

「本ワークショップの目的を前面に出して作ったポスター、研究のアピールポイントと悩みを明示するための要旨フォーマット」

参加者からいただいた声

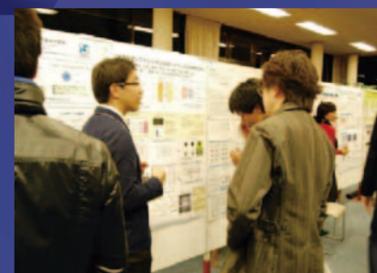
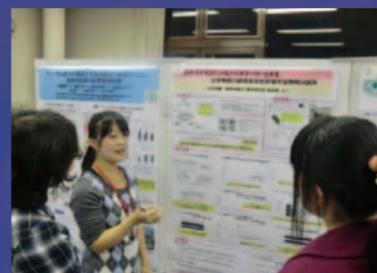
本ワークショップの運営や内容については以下の点で良い評価を頂きました。

- 1.総合研究機構バイオ領域の名の下で、他学部他学科の学生や若手研究者が一堂に会して研究発表を行い、研究科や学部を超えた交流を実現できたこと。
- 2.学生から若手教員までが対等な立場で研究発表を行い、討論やアドバイスの交換などの研究交流を実現できたこと。
- 3.各々の発表者が研究のアピールポイントや限界点、悩みなどを効果的に明示できていたこと。

学部1~2年生の参加者からは「見ているだけでも楽しい勉強になった」という声も聞かれました。また、発表テーマの選択については、総合研究機構に属さない研究室の学生

からも発表したいとの要望がありました。今回は機構内の企画ということから、残念ながら機構外の研究室からの発表をお断りしましたが、このような声や要望や声にも応えることで、総合研究機構が研究交流のニーズの受け皿としての役割も果たせることが期待されます。

開催日時について、今回は午後5時開始、午後8時半終了にしましたが、この時刻に戸惑った方も多くいらしたようです。土曜日の午前開始に交流会といった形も良いのではないかとご提案を複数の方からいただきました。このような反省点を活かし、他にも発表時間の取り方や長さなどに工夫をしながら、総合研究機構で実のある企画が続けられていくことを期待しています。



「本ワークショップで実現した活発な研究交流」